貝塚博物館紀要　創刊号（昭和41年度）

目　　次

「貝塚博物館」の開館 …… 1

〔特別寄稿〕

加曽利貝塚博物館に望む　鈴木正夫 …… 2

加曽利の博物館　滝口宏 …… 4

加曽利貝塚博物館への期待とあり方　清水潤三 …… 6

加曽利貝塚の意義と保存対策　武田宗久 …… 8

世界的史跡を守る――「守る会」と「友の会」について　上野豪彦 …… 14

〔調査概報〕

千葉市加曽利町兼坂古墳発掘調査概報　後藤和民 …… 17

千葉市加曽利町新山古墳群発掘調査概報　後藤和民 …… 27

〔研究論文〕

縄文時代集落考（Ⅰ）　後藤和民 …… 41

〔編集後記〕

巻　頭　言

千葉市加曽利貝塚博物館は、加曽利貝塚を中心とする縄文時代の貝塚を伴う集落に関する歴史科学博物館として発足した。その期待は大きく、その任務は重い。

博物館は元来、研究機関であると同時に教育機関という二重性格を帯びている。この点、大学と類似しており、実際に、大学などの研究機関と密接な連繋なくしては、その実質的な活動をおこなうことはできない。

中には、社会教育法などに基づき、博物館は社会教育機関だからといって、その教育機能のみを強調する傾向がある。また、教育機関というと、その教育すべき内容は、他の研究機関における成果のうち、ほぼ普遍化した「定説」を導入し、それを解説し伝授する場所だという認識が意外に多い。これらは本質的な誤解である。

これは、小・中学校における義務教育や高等学校における基礎教育など、学校教育を中心とした狭遍な認識である。一般の社会人が現実の生活体験を通じて、その中から把握した自主的な問題意識や学習意欲に対して、なんらかの指針や解決を与えるためには、そのような既成の常識や定説だけでは到底不可能である。そこには、当然のことながら、博物館と利用者との密接な対話が必要となり、それによって、常に創造的・前進的な調査・研究が要請されるはずなのである。

もともと博物館とは、利用者の自主的な学習の場、創造的な調査・研究の場である。博物館は、常に利用者の問題意識を感受し、同時代人の共通の問題として受け止め、むしろそれを先取りするような先導的役割を果すべきである。すなわち、博物館は利用者との共同学習、共同研究の場なのである。

したがって、研究なきところに教育などありえない。博物館で実質的な教育効果を挙げるためには、当然、博物館独自の積極的な調査・研究が必要となる。それが、博物館における教育内容を豊富にすると同時に、その内容に対する確実性と責任性を確保することになるのである。すなわち、博物館における研究成果を展示に反映すると同時に、その根拠を明示し、その正当性を世に問い、大方の叱正や教示を得るためにこそ、この「紀要」を公刊するものである。